

目指す学校像	SSH指定校として「自主・自律・創造」の校訓のもと、自ら育んだ高い「志」を実現し、次代を担い国際社会をリードする人材を育成する。
--------	--

重点目標	1 SSH指定校としての取組を起点に、全校生徒の「志」を育み、一人ひとりの第一志望の進路を実現する。 2 自ら課題を発見し、解決する主体的な学習態度を育てるとともに、授業の質を向上させ、社会のリーダーとなる確かな学力を身に付けさせる。 3 北高生としての品格を高め、健全な心身と豊かな人間性を育む。 4 地域の理数教育拠点校として活動すると同時に、グローバルな研究活動を展開して国際社会へ開かれた学校に発展させる。
------	--

達成度	A	ほぼ達成(8割以上)
	B	概ね達成(6割以上)
	C	変化の兆し(4割以上)
	D	不十分(4割未満)

学 校 自 己 評 価							学校関係者評価		
年 度 目 標					年 度 評 価			実施日 令和 年 月 日	
番号	現状と課題	評価項目	具体的方策	方策の評価指標	評価項目の達成状況	達成度	次年度への課題と改善策	学校関係者からの意見・要望・評価等	
1	<現状> ○今年度、SSH1期目経過措置となる。SSH1期目の5年間で行ってきた事業の振り返り、内容の総括を行い、2期目指定に向けて具体的な方向性と計画の策定をおこなう。「さいたま STEAMS 教育」の基盤を作るための具体的な方策および活動内容を策定し実行していく。 ○大学入学共通テスト大学テスト(旧入試センター試験)受験者が295名と新型コロナウイルス感染症が拡大する中でも学年の8割を超えた。ここ数年は9割前後の受験者数が定着しており、大学一般受験の傾向が着実に浸透している。一方で5教科受験者は74名でセンター受験者の2割にとどまり、現役国公立大学合格者が28名である。志望校・学部・学科を考える際に挑戦するより確実に進路を決めたいという保護者・生徒の安全・安定志向がある。 ○進路情報の提供をどのように伝えていくか、学校としての実績と経験を残して次に活用できるような工夫が期待されている。 <課題> ○SSH2期目の指定と、次期学習指導要領を踏まえた、本校の課題研究型授業の構築が大きな課題である。SSH推進部やカリキュラム委員会はもとより、全職員一丸となった対応が必要である。研究指定となる「さいたま STEAMS 教育」も積極的に推進する。 ○生徒が明確な高い「志」を抱き主体性を持って挑戦し学ぶ姿勢を育むと共に、それを実現できる環境整備に努める。全教職員が情報を共有できる環境を作り新入試の準備を行い、担任・副担任が生徒・保護者へ正確な情報提供を行えるように協力する。 ○総合型選抜・学校推薦型選抜定員増への対応を進める。が必要である。	SSH校としての取り組み	① SSH指定5年間の取り組みを卒業生アンケートの結果も生かして客観的に評価し、他校SSH校の研究・分析を通して新規事業の開拓をおこない年度内での実施をしていく。 ② SSH指定2期目に向けて学校全体のコンセンサスをとり、具体的な目標と方向性を整理し学校全体で共有できる環境を構築する。	① 過去5年間に行われてきた様々な評価を分析、さらに、他校SSH校の研究を行い、SSH事業の取り組みについて総括する。得られた結果を元に新規事業開拓ができたか。 ② 本校のSSHの取り組みは数理探究およびSTEAMS TIMEを中心に多くの教員から協力をいただくことができていた。積極的に意見を交換できる環境を構築していく事ができたか。					
		高い「志」の育成と進路実現	① 生徒の「志」を高めるため、各学年・教科・進路指導部による組織的・計画的なキャリア教育を実施する。 ② 学年団と協力して、保護者に対しても進路情報を発信する。 ③ 卒業後の具体的な進路目標を早期に意識づけるため、進路希望調査及び個人面談を実施し、その内容を学年・進路指導部で共有して指導する。 ④ 家庭学習を習慣化し、効果的な時間管理意識を高めるため、タブレット等を活用して学習記録を付けるように指導する。 ⑤ C l a s s i ・スタディサプリ・模試復習サイトの活用を推進する。 ⑥ 補講(長期休業・後期)の積極的な参加を呼びかける。映像講座などの活用も促す。	① L H R や総合的な探究の時間等を利用して、学年に応じた進路行事を実施できたか。 ② 保護者に対して進路情報を提供できたか。 ③ 進路希望調査と、個人面談が実施できたか。生徒の進路動向を学年・進路で共有できたか。 ④ C l a s s i 等を使って学習の自己管理をした生徒が7割を超えたか。 ⑤ スタディサプリを視聴できているか。また、朝学習・宿題配信などでの活用ができたか。 ⑥ 年間で20講座以上の進学補習を開講できたか。					
2	<現状> ○臨時休業となった後、オンライン授業が速やかに実施されたこと、テレビ会議や授業支援のシステムに関する教員側の研修等が、教員同士の連携・協力により実施され充実した授業ができた。 ○タブレット活用の実績と経験をさらに広げ、課題研究や教育相談にも生かしていくような取組が期待される。 <課題> ○授業でのiPad活用や、学習支援ソフト、テレビ会議アプリなどを使ったICT教育、アクティブラーニングの推進がさらに求められる。 ○1年生の「数理探究」における課題研究、2年生の理数科、SSC1クラスの合同展開の課題研究の内容の充実が求められる。 ○英語4技能習得を目指し、OSTの実施方法、外部検定の在り方などを検討し、学校全体で連携する必要がある。 ○入学選抜において、高倍率を維持すべく募集事業の検証、改善をすすめていく。	生徒の学力向上に向けた全校で取り組む授業力の向上	① 1、2年生の「数理探究」において、生徒が主体的に学習課題を見つけて論理的に分析し、計画的な課題解決力を身につけさせる。 ② ICT機器をフル活用し、授業支援サービスやテレビ会議アプリを利用した教育実践を順調に進め、アクティブラーニングの実践を促進し、効果的な新しい授業・指導法の方策を研究する。 ③ 授業アンケートを実施し、授業改善に役立てる。 ④ 英語4技能向上に対して学校全体での取り組みを推進する。 ⑤ 中学校・塾とできる限り連携し、きめ細かな情報交換を行う。 ⑥ 学校説明会・体験授業を充実させ、理解を深めてもらう。 ⑦ H P やパンフレットの内容を改善し積極的に広報活動を行う。	① 数理探究の課題研究において、論理的に仮説を立て、それに基づいた研究計画が作成されたか。 班内分担や共同作業が円滑に行われ、充実した発表ができたか。 ② 授業支援ソフトやテレビ会議アプリを使い、新しい形の教育を効果的に提供できたか。 ③ アンケートが実施され、授業改善に役立てられたか。 ④ O S T や外部検定が組織的かつ協力的に進められたか。 ⑤ 具体的方策を実行できたか。 ⑥ 学校説明会等参加者数を多く確保し、満足してもらえる内容で行えたか。 ⑦ 普通科理数科ともに高倍率を維持できたか。情報を効果的にHPを通じ発信できたか。					
3	<現状> ○多くの生徒が部活動を通じ学校周辺の清掃活動に取り組んでもらい、毎年地元自治会で課題となる落ち葉対策の改善につながったことも感謝されている。 ○学年通信が学校生活や受験対策等について分かり易く親しみある内容となっておりとても良かったと評価を得た。 ○風紀委員による登校指導や、自転車点検は毎学期定期的に実施し、生徒の安全意識高揚に努めている。しかしながら、自転車の乗車マナーに関して、今後も継続的な主体的活動や話し合いが必要である。 ○SNS やタブレットを利用したトラブル防止や不正使用防止の重要性が増しているため、利用に関しては年間を通して指導していく必要がある。 ○教育相談の件数が年々増加している。更に開かれた、利用しやすい環境作りのための工夫や方策を検討していく。 <課題> ○「自主」「自律」の校訓のもと多くの生徒は落ち着いた高校生活を送っている。生徒自ら学校生活の中で主体的に判断し行動できるような活動を促進する。 ○自転車通学、交通機関利用通学ともに多くの生徒は安全に登下校をしている。年々減少している事故件数がゼロになるよう職員、生徒へ喚起を促す。 ○教育相談の件数が、年々増加しているのでカウンセラーと相談しやすい環境作りのため相談室を移転した。教育相談体制を維持、継続させることにより定着を図る。	安心、安全な高校生活	① 生徒自ら安心安全な高校生活が送れる環境作りを風紀委員が中心となって行う。 ② 登下校マナーアップ・駐輪マナーアップ・挨拶運動を風紀委員会が行う。 ③ 委員会活動を教職員がサポートする体制を整える。 ④ 「自転車運転マナーアップ推進校」として交通安全教室を実施する。 ⑤ 携帯・インターネット安全教室を年度当初に実施し、年間を通じて生徒の意識向上を図る。	① 風紀委員、教職員による各活動が1年間を通して行われたか。 ② 登下校、駐輪、挨拶のマナーアップが図れたか。 ③ 教職員がしっかりサポートできたか。 ④ 交通安全教室を実施し、さらに事故件数が減少したか。 ⑤ 携帯・インターネット安全教室を実施し十分な指導ができたか。					
		教育相談との連携	① 教育相談委員会を各学期定期的に実施する。 ② スクールカウンセラー、特別支援コーディネーター、スクールソーシャルワーカー、教職員、保護者間で情報交換を密にする。	① 教育相談委員会を各学期実施できたか。 ② 関係者間で情報を密にし、共有することができた。					
4	<現状> ○グローバルプログラムに関してはすべて中止となってしまったが、オンラインを通じて台湾の高校生とグローバルプログラムを展開することができた。展開できた取組があることで生徒は前向きに捉えており、強い達成感も持つ者も多かった。SSHサイエンスフィールドワークは長瀬フィールドワークのみ実施することができた。 ○7月に実施が予定されていた「自由研究サポートプログラム」は過去の研究内容をHP上で配信した。ASEP Jr.Hiについてはフィールドワークおよび発表会は行わなかったが、化学、生物、数学、スポーツ、3Dプリンターなどのプログラムは実施することができた。 ○天体観測会は実施することができた。 ○エンパワーメントプログラムは、他校との合同開催により実施することができた。 <課題> ○with コロナに対応したグローバルプログラムやSSHサイエンスフィールドワークの開発を行い、実行していく。 ○アウトリーチ活動を通じて、引き続き市内の理数教育拠点校として、小中学生にサイエンスに対する興味関心を高めると同時に「さいたま STEAMS 教育」の核となるプログラムを展開し生徒の育成を図る。	SSH校としてのグローバルサイエンスリーダーの育成	① 生徒の想像力、探究力および発表能力を育成するために行われてきた数理探究、サイエンスに対する興味関心を高めることを目的に実施されてきたSSHサイエンスフィールドワークなどをどのように実施していくのかを急急に考え、計画していく。 ② 予算削減、with コロナの環境の中オンラインでグローバルプログラムを実施し、双方向かつ継続的な活動を行う環境をつくる。	① 昨年まで行われてきた内容を見直し、新しい状況に対応するための行事を計画実施することができたか。また、行われた行事などに対して生徒はどのような評価を行ったかを検証する。 ② 既存のグローバルプログラムの予算を削減させつつ、オンラインで内容の充実を図ることができたか。参加者アンケートの結果より評価する。					
		SSH校としての地域の理数教育拠点校としての取り組み	① 「自由研究サポートプログラム」、「ASEP Jr Hi」の内容をさらに充実させるため、準備段階をさらに充実させ参加者の満足度を上げていく。 ② 「さいたま STEAMS 教育」の基盤を作るため、地域の理数教育拠点校として市内の小中学校との連携を深め、情報の発信や新規事業を展開していく。	① 地域の小学生および中学生に対してサイエンスに対する興味関心を高めるためのイベントなどを企画実行することができたか。 ② 「さいたま STEAMS 教育」の基盤を築き、市内の小中学校との連携を深め、情報の発信や新規事業を展開することができたか。					